

鈴木佑治先生

## 「すみ会」作文の指導

昭和四十年新春因島市外浦小にて御講述

作文指導の単純形態

序——優劣共に

新しい作文指導のやり方というのを聞いていると、「これは優等生指導法です。」とは言わないけれども、実際にそういうことがやれることはザラにはないわけです。大方の学級で、「大いに発表せよ。」というけれども、どの子もこの子も全部が全部できるわけではないのです。こういう能力をつけたい、それにはこうすればよい、と、もつともな話だけれども、そういうことがやれるのは優等生だけではないでしょうか。優等生指導法ですとは言わないのですが、静かにその話を聞いてみると、全部優等生にだけ適用できる指導法

す。一般的の学級には、優等児ばかり、劣等児ばかり揃つてゐるわけではありません。優中劣好みにいるわけです。そういう好みになつてゐるのを受持つて、どうやつて力をつけていくことができるか。優は優なりに、中は中なりに、伸ばしてやると同時に、劣もやっぱりみんなと一しょに勉強できるようにすることも真けんに考えなければ、教育の危機がくるのではないか。どううか。

そういう考え方で、私は国語も作文の取扱いもやつてきているわけです。天才児ばかりだったら、誰かの方法でそうやってもよいでしょう。何とも普通には出来ない子ばかりいるのだったら、前に述べた人のやり方もよいでしょう。けれども、こみにいる学級では、果してそれらの方法が適用されるかどうか、根本問題として私は考えているのです。

私の言うことは新教育に逆らっているようですが、そうではないのです。ああいう子どもばかり、こういう子どもばかりであつたら、大いに結構であろうと申し上げているのです。けれども、優劣こみに受持つてゐる時には、一方に特権を与え、他方には教育の恩恵に浴させないというわけにはいかないでしよう。それで全部によくわからせるにはどうしたらよいか。ということを申し上げるのです。

一、なぜ作文教育は低調であるか

また、劣児を非常に憐れんで、力の弱い子どものために献身的にやつておられる方も何人かあるわけです。それから、人からしさいたげられるような子どもを集めて、よくもよくもこんなにして下さるものだと、本当に敬意を表し、感謝を捧げたい方々もあるのです。けれど共、この優等児ばかりを対象にしたやり方も、劣児ばかりを対象としたやり方も、共に一般の学級には適用できないことなので

今日は作文のお話をします。作文もこの考えに立ってやるのです。私の言う通りに作文指導をしても、懸賞に当選するとか、教科書にのるとか、単行本になるとかいうような、世間からヤンヤと賞め

そやされるものにはならぬと思います。そうするには別の方法があるのです。私が申しあげるのは、「みんなが、喜んで作文を書くようになる」ためには、どうすればよいか。ということです。

作文が大事な教科書であることは誰でも認識していることです。ところが、その割に実績が挙がっておりません。なぜか？　というと、いろいろ理由があるわけです。

#### ○第一には、書かせない、ということです。

戦前は、綴方の時間が一週間に二時間ありました。時間割には二時間掲げておかなくてはならないのです。教師は「これしなくてはならん。いやだなあ。」と思っていても、子どもの方はちゃんと仕度して待っているし、時間割に綴方と書いてあるから、やらないと、「あの先生、綴方しない」といわれるから、仕方なしに書かせていました。

私がまだ若い頃、私は宮城師範を出て八年間奉職し、九年目に東京に出たのですが、その頃のことです。方々の学級を見て驚いたことは、作文をこんなに山のように積み重ねているのです。作文の時間には毎時書かせるのですから、かなりたまるわけです。書かせまいと思っても後援会（P.T.A.）で原稿用紙を刷ってくれて各学級に配給になっていますから、級長さんはちゃんと配つてくれます。しようがないから書かせるわけです。そしてそのまま積み重ねておくようです。それも読み方の一種で、「つんどく」というそうです。あんなに貯めてどうするのかと思つていますと、ストップをたくさん頃になつたらだんだん少くなつて、しまいには無くなります。どうしてストップが出ると無くなるのかと、今もなぞの一つです。

#### ○第二は、選手主義ということです。

特定の子だけを対象にする作文教育のことです。ひとりの子どものは作文だけ取上げて、一学期もかかつて直させる。それは原文は子どもが書いたのかも知れませんが、何時間も何時間も手を入れていふると、原型もとどめないものになるのです。原型をなくしてしま

それでも、そういう風に特設していたから、昔は作文を書かせましたが、今は書かせないことを本体としている教師が多いようです。書かせないでは、何としても実績の挙がる道理はないのです。「書かせても、どうしてもうまく書かない。」といつても三年に一度位書かせたのでは、それでうまくいったら先生はいらないわけです。

私は教員生活を三十九年しました。その中、三十一年を東京で、しかも又その中十九年を杉並区に勤めました。この杉並区に、「作文何とか会長 ○○○○○」という男がいます。その男が「国語の仕事を、読・聞・書・話だ。他は無くなつてもよいが「書く」だけは残さねばならん。」といいます。そんな無茶はできないわけですが、そんなに「書く」を重視したことを言いながら、「書かすと読むのに時間がかかるから、あまり書かすな。一ペん書かせたら、その中から一編をぬいて一学期間ぐらい直して書かせないと懸賞に当選するものではない。その学校の名声を擧げることは出来ない。」などと言っています。

こんな考えは、私共には凡そ縁遠いところの話なのですが、作文何とかの会長すら「書かせない」というのですから、一般的の先生たちが作文を書かせないのは当然かも知れません。とにかく、書かせないということが、実績の挙がらぬ大きな理由の一つだと思うのです。

よう直す。それが特定の子に限る指導ですから、作文が伸びる筈はありません。

聞いている他の子は、自分のことではないと思っています。人の作文だから面白くないのです。書いた子は、書いた始め頃は感激もあるが、一学期もそれが続いては、そう感激が何時間も持続するわけではありませんから、うんざりしてしまいます。その上に自分の作文が無茶苦茶に修正されて、痕跡さえ止めないものになると嬉しくないです。書いてとりあげられた子が面白くないのですから、とりあげられない子の方が面白くないこと夥しいものであることは言うまでもないでしょう。

○第三は、書きたいことを書かせないこと。

書きたいことを書かせないことも、作文の進まない原因の一つになつてゐると思います。指導要領でいろいろ要求されている「やれ報告文を書け、記録文をかけ……」ということにとらわれるために、何としても課題をするわけです。

作文を課題で書かせか、随意に（随意選題・隨選）書かせるかは、その昔、論議的になつたものです。広島高師におられた友納友次郎先生と、東京高師におられた私の師 芦田恵之助先生とが非常な論戦をなさつたのです。そしてついには、異例の立会論争が九州で行われ、この講演会は天下を湧かしたものでした。

私はこの両先生のためにお話するわけですが、このお二人の間は、人も羨む仲なのでした。芦田先生が文部省の教科書編集のお手伝いをされておられ、朝鮮の読本編集のため文部省をやめて行かれる時には、後任に友納先生を推薦されているのです。東京高師にも人が

いないわけではありません。それを広島高師におられる友納先生を推薦して行かれました。友とはかくありたいと思われる仲でありますのに、一旦この問題となりますと絶対に一步も後に譲らない。

友納先生は、「課題でないと系統的な指導は絶対に出来ない」とおっしゃる。芦田先生は、「書きたいものを書かせなければ、絶対に力が伸びない」とおっしゃる。ところが後に、友納先生は、「ああ、我誤まり。作文というものは随意選題でいかなければならぬのであった。」ということをある本に書かれました。そこで世の中はこれで一本におさまったのです。

ところが戦後また、型の変つた課題が入つたのです。それはどういうことかというと、詩をならつた一さつそく「おまえたちも詩をかけ」というのです。書けという先生は詩を書けない。シドロか三モ五モ書けない。自分で書けないものが、子どもに書ける道理はないのです。今はいいが、無茶なことを言う先生がありました。中にはシナリオを書けという人もありました。私はこの年になりましたが、今頃になつて始めてシナリオというものを読みました。まあ恐らくその先生もシナリオを初めて読んだのだと思います。それでシナリオを書けなんて言つても書けるものではありません。どの子もこの子も活動屋になるのではないのですから、頭ぐらいはかけるがシナリオなどというものが、おいそれと書けるものではありません。大体、生活と関係の無いものが無自覚に書ける道理はないのです。

私が小学校に入る日露戦争の頃です。小学校は尋常科四年まで、高等科も四年というその時代には、拾得物を警察に届ける届書を書けなどという課題を出されたものです。それを経て、友納先生によ

る「系統だてて課題をする」ことが流行したわけです。この課題主義がいう「あらゆる経験をさせよ」ということですが、義務教育の間にすべてを経験させることは不可能ではないでしょうか。どんなに系統だててこれをやるとしても、あらゆる経験をさせることは出来ません。「さあ、大島が大火だから見舞文を書け。」といわれても、「そんなの六年生までに習いませんでした。書けません。」というようなことでは、系統主義も役に立たないのであります。

あらゆる体験をさせることは出来ないし、又やらせたところで、世の中の進展に伴って、義務教育の間に身についた体験というものが無駄になることもあります。そんなことよりも、「私は文章が書けるんだ」という自信を、一人一人につけてやることが大事ではないでしょうか。文章なんか書けないという人間を作るより、どんな子どもでも、鉛筆握りさえすれば書けるんだというハラ構えを作つてやることが大事だと思います。

そこで、書きたいものを書かせないということが、作文教育を进展させない原因の一つであると考えるわけであります。

#### ○第四は、表現の技巧にとらわれることです。

表現技巧にばかり重きをおくと、技巧の下手な子は永久に置きざりにされます。いわゆる名文が書けるような子は天才扱いにされなければ、そうでない子はいつまでも先生から変な目で見られる傾向になります。

表現ばかり重んじると、甚だしいのは内省を禁じて、ある一つの思想にゆがんだような文を平気で書くようになります。そういう子どもたちが物心ついた時うんと悩むのです。先生にだまされたと言

っています。それはそうでしょう。その時は「うまい」と賞められるから、赤い文章も平気で書いたけれど、そんなことは自分の心じゃないのです。

ある県で、こういうことを発表した人があると聞きました。

(二年生の子が、日曜日に、小豆を打つてサヤから豆を出す仕事を手伝つて大変楽しかった。)という作文を書いた。するとその先生は、「日曜だろう。日曜におかあさんの手伝して楽しいことはないだろう? 本当に楽しかったか。」と責めました。始の中はがんとして樂しかったとしか言わなかつたが、段々に指導を加えていくと、樂しくはなかつたのだという本当の、本領を發揮した。作文の指導はこうです。

恐ろしいことです。子どもに「そのように親と一緒に働くことは本当に楽しいね。」と言ってやつたら、本当に嬉しくなつて働くのではないでしょうか。日曜日に働くのは楽しくないものだという思想を植えつけて、そういうことを無理に書かせられるとなるとこれはとんでもないことになります。

表現技巧をやかましくいうと、子どもは苦しくなつて剽窃文(盜作)をやつたりするようになります。そしてこれを賞めるというよううか。技巧に走り、表現の原動力を培つてやることを忘れたたら実績の挙がる道理はないのです。

## 二、教師の心構え

表現の原動力というのは何か。ものの見方考え方というものを生み出す生活態度を正してやらない限り、本物は生まれてきません。

生活態度を決める教科と言つたら、作文と体育ぐらいのものじゃないですか。作文は心を表現したもので。体育は直接動作に現わしたもので。

ここに、みんなに相手にされないような子どもがいる。そういう子どもと手をつけないで何かやらない限り、そういうものは取残される。私にも覚えがあります。私の組に顔色の白いような変な色をした子がありました。我々と地膚の色が違うんです。変にふくれあがった子でした。その子はみんなから手をつけと言われても絶対につながない。ひとりじょんぱりしていたのを今も思い出します。そういう違った生活態度を直してやるのが体育です。そういう気持が作文に現われる。これをぴりっとしてやることができるのが作文。これは大事な教科です。

表現の原動力を培うことをしないで、わざと表現の技巧をもり立てて、変なゆがんだものの見方をして、上手にかけば賞められてくるが、こういう子を育てるのだったら、全部がついていけないわけです。ある子しかつていけない。これが作文の出来ない大きな原因ではないかと思います。

それは、全員の子どもの作文を丹念に読んでることが大事ではないでしょうか。先生は「玻璃の鏡」になりなさいということです。私は行つたことはありませんが、エンマの府には「淨玻璃の鏡」というのがあって、生前の行いがこれに写ります。そうするとどんなにくずしてもエンマ様には判つてしまつて、それぞれの罪科がきまってしまいます。教師のハリノカガミは、悪いところをさがす鏡でなくて、良いところをさがす鏡でなくてはなりません。子どもが何の気なしに書いたことの中に光るものがあるわけです。子どもはそれが判らずに表現している。それを先生の鏡に照らして子どもの足もとを照らしてやります。

あなたたちには、こういう良いところがあるがこれに気がついてるか? という行き方で照らしてやります。すると子どもは自分を知つてきます。こういう役目を教師はするのです。こうしてやれば少くとも作文が嫌いだという子どもは一人もいなくなると思います。ここに来る前に芦品郡で作文をやつたのです。三年生の作文で、「作文の好きな人、手を挙げなさい。」と言つたら、何人か手を挙げましたが、非常に数少ない有様でした。「それからもう一つ聞くが作文が嫌で嫌でたまらない、作文と聞いたら身震いするというくら

せ、たくさん直さることが作文を上手にする道とされています。いつまで経っても真理ではありませんか。

い嫌な人。」まさかいないだろうと思ったが手を挙げさせたら、何と好きな人より多いのです。びっくりしました。

作文の嫌いな子どもがなくなるようにしなくてはならないし、嫌いなところが全員が好きで好きでたまらない、作文の時間が待ち遠しいと思うような子どもにしてやることが大事なのではないでしょうか。それが出来て追々上手にしてやるのです。上手にするも何もない。嫌いな子を作つては上手にならんのです。一応好きだとう子どもになったら、必ず上手になる道が開けるわけです。それは、その作文に対する自覚と自信を与えていかなければなりません。作文に対する自覚と自信とは、なぜこれを書くかという自覚がなくてはならない。自分は文章が書けるのだという自信、徐々に自分の長所というものが自覚されるように、そして短所をどうしても改めねばならんというところをわからせて、何とか少しづつでも直していく指導がなされなくてはなりません。

そこで、作文の教壇には昨日御覧にいれた記述の扱いと、今日御覧にいれた批正の取扱いがあるわけです。

### 三、記述と批正

記述というのは、書かせることです。書かせる場合には、どの子も安んじて書けるという空気を作つてやることが大事になってきます。

書かせると、ここに否応なしに成績物というものが生まれるわけ

です。生まれたらこれをよく読んでやることが大事です。一つ一つ克明に読んでやるということが大事です。私は一々評なんか書きません。そんな時間があったたら、一回でも多く読んでやります。その方が子どもを育てるのにいいわけです。

仮にここにお釈迦様のような方がおられれば、より多く読んで、「ああ、こんなの読んだぞ。また書いて。」というと書けるようになります。うんと力のある人がそんなのやると、からつと変ったような気がするのです。私はなかなかそこまではいきません。そこで、その成績物をよく読んだということを、子どもによく判らせてやらねばなりません。その仕事が批正の仕事です。

私は子どもの作文をダイヤモンドだと思っているのです。ダイヤはダイヤだけれども、磨かないダイヤです。これは輝くばかりの光を蓄えているんだけれども、子どもはどう書いていいかそこまで手が届かない。その手の届かないところまでどうしたら届くか暗示してやらねばなりません。中には手が届くどころか心も届かない者がいます。そういう者には心を察してやらねばなりません。子ども一人一人によく判るようにしてやつたならば、その結果として次の記述が、一層よくなるのではないでしようか。だから作文では記述が大事なのです。

記述は大事なのですが、記述記述と記述ばかりさせても、お釈迦様でないからうまくいきません。そこで批正をやるわけです。

批正は何のためにやるかというと、前の時間の記述がよりよくなるためにやるのです。そこで記述の教壇はどうやるか。批正の教壇はどうやるか。今日は批正の教壇をみて頂いたから、批正のお話から申上げます。

## 四、批正の時間の扱い

### 1. 総評

批正のときは一番に総評をしてやります。全体の作文を通して感じたことを言ってやるのですが、必ず長所を言ってやるのです。でも、「どうしても長所がない」と考えられる方がありますが、表現の方では拙いものでもその考え方はよいというものは長所です。行ないがよいというのも長所でしょう。表現がよいのも長所です。あらゆるものから長所を見つけ出してやるのです。先生の注意をよく守ってくれるのも美しいことではないですか。あらゆる面から見たら必ず長所はあるのです。

長所を言つたら激励のことばをこれに添えてやればよいのです。そしてちょっとぴりその後に短所をつけてやります。長所はあらゆる面から拾つてやりますが、短所は必ず表現上の短所に限ります。「がないとか、がないとか、誤字があるとか、「ー」がおちていたとか、改行を忘れていたとかを。これは具合が悪いから気をつけるんだよと話してやります。  
これも、たくさん並べられると、たとえ長所だといつても、「先生、ほんとかい。そんなにあるわけはない」と思うから、一つだけにするのです。短所でも一つにするのです。あれもこれも一ぺんに出されると困ります。一つだけです。それさえ完全に直るのはなかなかのことです。一ぺんで直るなどと考えるのはよほどオメデタ

イ先生です。先生自身でさえ一ぺんに言われて出来ないのがあるのですから。私たちは年末になると年末調整というのをやられるでしょう。自分の経済と直接つながる大問題でも校長や教頭から出せと催促される方があります。そういう大事な事さえ忘れるのですから、いわんや子どもは一度では覚えられません。一つの短所を直すのにもよほど気恥にからねばなりません。

これは総評ですから、個人攻撃をしてはいけません。「お前はあれだけ言っても判らないのか」と言われたら、いくら相手が先生であってもグッときます。個人攻撃はよして、それとなく「気をつけなさいよ」とやっていくのです。

### 2. 点呼

この点呼が先師吉田先生の専売特許というものです。

点呼では、大体において中以下の子どもの作文を取上げます。あんまりはつきりさすと、「ああ、あれは出来の悪い子だけやられるんだな」と思わせるから、教育的配慮で以て、出来のよいのもちょいちょい入れてやります。

文章を読んだらそう巧いことはないけれども、先生の話しにのせて、「こういう文章だったよ」と、少し大げさな表現をいれて「こう面白かったよ」と言うと、みんなはいかにも巧いこと書いているなと思うでしょう。読んでみるとさっぱり面白くはない、そこまで子どもは手が届かない。手の届かないところは先生が手をかして届くようにしてやらねばなりません。

夏に青森で四年の子の作文を扱ったとき、点呼で取上げた一つに